

鴻 koh

月刊俳句誌

令和4年8月1日発行  
（毎月1日1日発行）  
第17巻第8号 通巻194号

8 月号

2022



詩ごころの旅はこれから雪加鳴く

空に色あり早苗田に風のあり

乗つ込みの鮒どちに日のたつぷりと

告ぐるべき言葉を持たず夕牡丹

鷺の来て柵田一段づつの青

帰去来の風が仏法僧の山

# 帰去来の風

主宰作品

増成栗人

青簾捲けよ狐の嫁入が

あけくれの音を奏である雨蛙

菖蒲田にぬばたまの闇多佳子の忌

鮎漁を解禁の日よ雲走る

ざり蟹を釣る子がひとり沖繩忌

椶の芽を摘みしと云うてもてなさる

諸葛菜浦曲に宵の来てゐたり

# 夏至

副主宰作品

谷口摩耶

天道虫子に遊ばれて翅ひらく

噫せ易き冷し中華のひとつち目

白玉善哉雨雲低く垂れ込めて

紫陽花やひとり遊びの上手な子

助手席にシューマンを聴く夏至の夕

合歓咲くや病院通ひも三十年

和菓子屋に赤飯を買ふ梅雨晴間

水撒いて炎暑の庭を冷ましけり

底紅の初花ことに可憐なる

リコーダーのふつくら響く夏館

夏至の日のいつまでも暮れない夕方、車の助手席に乗っていたら、ラジオからシューマンのピアノ曲が聞こえて来ました。若い頃によく弾いていた「子供の情景」です。その中で有名な「トロイメライ」(夢)は夏至の夕方の光に合っていて懐かしい気分になりました。日本では夏至の日も夜が来ますが、ヨーロッパの北の方は白夜です。「夏至祭」は大切なお祭なのです。

# 俳 作品抄

## 同人選

十二単一筆箋で出す便り  
ホルンにはホルンの譜面青葉風  
母の忌を修し八十八夜寒  
うららかや美濃の和傘のかがり糸  
不規則に落ちる雨垂れ卯月くる  
逝く春の叩いて使ふ山椒の芽  
蒲公英の絮のまんまるいざ飛べよ  
春愁やマトリョーシカの長睫  
荷風の忌鼻緒のゆるき宿の下駄  
灯台の螺旋を登りつめて春  
風五月野鳥のみちの道標

水谷はや子  
祐森司  
田部富仁子  
井上つぐみ  
佐藤あさ子  
山内宏子  
山岸明子  
石垣真理子  
中西富士子  
鈴木崇  
田邑利宏

増成栗人 選

## 会員選

血圧の折れ線グラフ鉄線花  
さまざまなもの束ねて更衣  
将門の地よたかなの伸び放題  
虹色のペン買ひ足して夏隣

藤原明美  
青木まゆ美  
相川健  
中島宙

柿の芽のまだ幼くてサラダ色  
雨上がり凜と立ちたる花菖蒲村手雅子  
暑き夜やホール染めたるドラムソロ  
今まさに零れむばかり藤の花  
冷蔵庫また開けてをり妻の留守

福地タカ  
村手雅子  
三浦信行  
上杉馨  
よしの公一

谷口摩耶 選

# 「鴻」の歳時記 (夏編)

抽出 谷口摩耶

初夏 はつなつの畳の香る奥座敷 井上つぐみ

五月 聖五月地球が速く回り出す 花本智美

立夏 一木の大きく揺れる立夏かな 足立枝里

麦の秋 麦の秋庇の下に椅子ふたつ 佐藤あさ子

半夏生 土管から子の這ひ出だす半夏生 平野鉄哉

半夏生 豆腐屋の引き戸の固し半夏生 石垣真理子

水無月 風待月瀬戸内の島いくつ見え 神野未友紀

熱帯夜 熱帯夜なれど地球は水の星 西野桂子

夏の雨 登り来て緑雨に烟る天主堂 佐久間敏高

梅雨晴 手作りの消しゴムはんこ梅雨の晴 美濃律子

夕焼 沖に佐渡夕焼に手の届きさう 藤原翔

代田 田に水を張って田の神迎へけり 荒川心星

植田 やはらかな月差し込みし植田村 森川淑子

植田 早苗田の風を誘ふ丈となる 幡柏

今年日本映画が次々と海外の賞を獲得している。濱口竜介監督の『トワイフ・マイ・カー』がアカデミー賞国際長編映画賞を受賞。今回、取り上げる『PLAN 75』はカンヌ国際映画祭「ある視点」部門に正式出品され、カメラドール特別表彰に輝いた。昨今の映画はCGなど映像技術の激進な進歩を反映してド派手な大作が多いが、日本の受賞作品は人間の内面を細密に描くところに長所があるのかもしれない。特に『PLAN 75』はさまざまな日常の描写が大半を占めるが、その積み重ね方に工夫が凝らされていて非常に重厚な映画となっている。

『PLAN 75』の舞台設定はとてもショッキングだ。少子高齢化が世界一速く進行する近未来の日本で、七十五歳から生死の選択権を本人に与える社会制度が施行された。申請すれば国家の支援のもとで安らかな最期を迎えられるという。若年層にしかかる経済的負担を軽減するという名目で立法化された制度の名前は『PLAN 75』。その渦中を生きる人々の物語である。

あつて成立する句でもある。」風船がうつらうつらにのりもを染しむ気分が詠まれている。風船がうつらの紙風船のように膨らんだ果実は、思わず吹いて揺らしたくなる。老人の細い息でも十分に揺られてくれる愉快さを、鴻司師は楽しんでた。

しかし、尊厳死と称して老人を死に追いやる制度の前では、これらの句は無効となる。老いを楽しむことを許さない『PLAN 75』とは一体、何なのだろうか。自己責任論が幅を利かせる日本では各種の格差が拡大し、低所得者層や高齢者など、社会的弱者への共感や配慮が失われつつある。言ってみれば『PLAN 75』に繋がる風潮が今、社会を覆い始めている。

そうした危機感が早川監督を突き動かして、この映画は制作された。高齢者問題以外にも、外国人労働者への差別や障害者施設殺傷事件なども映画の背景に織り込まれていて、フィクションでありながら現代日本の優れたドキュメンタリーにもなっている。

「朝顔やひまわりこの顔に老い」

加藤秋野

# ON THE STREET

平山雄一



## 映画『PLAN 75』

早川千絵・監督 倍賞千恵子・主演

主人公は七十八歳の角谷ミチ。演じるのは倍賞千恵子だ。倍賞さんは最初に脚本を読んだとき、「衝撃を受けた」と語る。読後、すぐに出演を決めた。それはちょうど自分がどう生きてどう死ぬのかを考えていた時期で、ミチの生き方と重なる部分があったからだといふ。

これまで彼女は多くの役をリアリティをもって演じてきた。たとえば山田洋次監督の『遙かなる山の呼び声』（八〇年）では、ヒロインの民子とびたりと重なり役に生身の情熱と哀しみを与えた。その後も倍賞さんは多くの役を演じることを通して、同じ数だけの人生を経験してきた。今回、彼女にとって、困難な時代を生きる「老女ミチ」は、どう映ったのだろうか。非常にデリケートなストーリーだけに、

正直、この句には賛成できない。確かに老いていく顔にはひとつの傾向があり、内面的にも次第に自他の区別が曖昧になる心理がある。しかし映画『PLAN 75』には、個性を保ちながら老いていく人間が多く登場する。主人公の角谷ミチは夫に先立たれるも、一人で健気に暮らしている。仕事はホナルの清掃員で、同僚は同世代の女性たちだ、黙々と仕事をこなして、つましいながら幸せな時を分け合っている彼女たちの表情は豊かで、とても「ひとつの顔」にはぐくれない。

『PLAN 75』では、制度の勧誘員や相談員としてコールセンターで働く若者たちの心象も丁寧に描かれている。彼らの親類縁者にも『PLAN 75』の対象者がいる。電話越しとはいえ触れ合ったことで生じる感情の揺れや疑問にも、深刻な問題が含まれている。老人介護施設で働くフィリピン人のマリアが、娘の手術代を捻出するために報酬の高い『PLAN 75』関連の施設に転職したり、今の日本の抱える問題がともりリアルに描かれている。僕が見に行った時、映画館は満席で、観客の中には若い人たちが多く



自問自答を繰り返す撮影になったといふ。「生くることとややく楽し老の春」

富安風生

「老いたれば風船がうつら吹いてみし」

吉田鴻司

「老の春」の句は、風生八〇才の時の作。それだけの齢を重ねたからこそ訪れる安寧な日々への感謝が詠われている。老いた本人だけでなく、長寿を尊ぶ社会が見受けられたのが頼もしかった。

「葛咲くや心にいつも杖添へて 鴻司」  
そんな時代を踏まえてこの句を読むと、俳句という文芸の優しさがいっそう際立つ。

それにしても倍賞さんの演技は見事である。日常生活のふとした場面ですくりに顔や手の皺が克明に映し出される。女優としては大変な冒険だと思われるが、倍賞さんは臆さず演技に集中する。特にセリフのないシーンが秀逸で、指や顔を淡々と捉えた無言の映像が雄弁に語りだす。それは圧倒的に美しく、神聖な表現になっていた。

『PLAN 75』での死を決意して施設に行くことにしたミチは、その不自然さに気づき、周囲の人間たちもそれぞれの心に従って動き出す。ミチの奥には確かに倍賞さんが存在している。ミチという役柄と、倍賞さんの気迫が溶け合って、老いだからこそ表現できる希望がそこに見えるのだった。

「白樺の幹ぼつぎりと冬を越す 飯川久子」

『草蜉蝣』は著者の第三句集『遍歴』より七年を経た第四句集。始めて手にしたとき、句集名に似た静かなやわらかな感触が、その装丁の中からも伝わってきた。著者の人柄が滲み出るような手ざわりがあった。しばらくその手ざわりを楽しむように、掌中にあたたためていた記憶が鮮やかに残っている。

草蜉蝣昼月淡く山の端に  
草蜉蝣九鬼水軍の島にかな  
草蔭を出でぬ草蜉蝣の昼  
草蜉蝣やはらかな雨来てみたり

その題となった「草蜉蝣」の句は四句収納されている。そして著者はそのあとがきの中で「私の俳句の多くは旅や近隣の吟行で為した作品、それをどう己が息遣いとして打ち出せるか」というテーマに添って「熟慮の上、この『草蜉蝣』を句集名とすることに決めた」と記されている。草蜉蝣というかわい小さないのち、そのいのちに焦点を当てた作品が並んでいる。著者の句材として最もふさわしいものではないかと受け止めている。

大和三山眠れるほどの山でなし  
鳥けもの眠らせて山眠りある  
熱田への渡しに冬の鴉の声  
冬の鴉百日百座の寺にかな

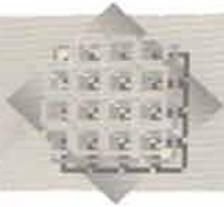
沿う町の景の描写の中に、信濃という山国の詩情が物語を描くように語られている。

芋水車羽後も奥なる里にふる  
象潟の雨の鴨上戸かな

等「奥の細道」の地、出羽を詠った句もところどころで見掛ける。「鴻」主宰となられてはば二十年、各地への句会指導や作句のための行脚が続いている。正直、高齢で瘦身の見かけと違い強かさを持つ作家である。しかし、そこで詠われる句は、おおむね明るく、おおむね穏やかに景を捉えられている。殆どと言って暗きを詠った句はない。育ち来し暮らしや家族、周囲を囲む知己、友人。そんな環境が生み出した著者の詩情の行き着くところなのであろうか。この静かな明るさにも強く心を惹かれている。

源義忌鴻司忌秋の澄むことよ  
源義の墓に二月の雪が降る

著者は角川源義を生涯の大恩人だと話す。この思いは亡き吉田鴻司とも繋がっている。俳句の師のほかに源義は己が暮らしの灯火だったとも言う。鴻司も身ほとりにあつて、ともに源義への傾倒を深めて行った大きな先輩であつたと言う。著者の句には忌俳句はかなりあるが、著者が最もその忌を語るのは、



● 荒川心星



藤原京跡あたりから鮮やかに見える大和三山は標高・百メートルほどの小さな山。そこに暖かき日が当る。そんな古都への郷愁が「山眠る」の季語に巧まずに打ち出されている。また桑名の渡しで聞く鴉の声。千葉・市川市の中山法華経寺で聞く鴉の声音。ここは日蓮上人の百日百座を組まれた寺院でもある。ともに往時へと心を放ばす著者の咬きが聞こえそうな作品である。

火を焚かな近江も奥の月の背戸  
近江八幡曼陀羅の雪が降る  
近江はも啄木鳥が樹を叩く音  
あつけなく雪となりたる関ヶ原

関西出身の著者であれば関西を旅した句がかなり多くある。それも大方が奈良と近江。著者は子供の頃から、友人とこの二県を多く歩き、残りいる自然に、暮らしの風習に、親しき歴史の足跡を見つけていたからだと言う。余りにも観光化して美麗な京都より、この地が好きだと言う。この地に佇ち往古への思いに浸る作者像の見える作品である。

奉納の妻籠土雛ひかた吹く  
岩魚焼き中仙道の狐雨  
旅籠名の袴行灯緑雨くる

妻籠・馬籠を歩いた作品。静かに語られる溪谷に

紛れもなくこの二人であろうと推察している。

更衣済ませて妻の逝きにけり  
ぼつぺんがそのまま母の手文庫に  
母よ妻よ鶴の橋渡り来よ

六十四歳の妻を、百一歳の母を天界へと送った思いが、そのままじんと胸に届く作品である。決して大上段にその計を語らず、明るくぼつりと呟くような句の中に逆に深い哀しみが滲み出る思いが残っている。著者を支えてくれた大事な家族、その家族があつての今の著者がある。振り返るようなぬくもりの見える作品である。

米寿とは老いの振り出し敷柑子  
炉火爆ぜよ自問自答のまだ途中  
草笛に草笛をもて応へけり

句作りを志してはば七十年という著者の現在の心境が「私も米寿。しかしまだ自分の俳句は見えてこない。老いたれば老いたりの静かな青春性を追求してゆきたい」と、帯文の所信に記す著者。中年の頃には仲間から青年・栗人と呼ばれていた著者らしい生きざまである。この一冊を私の珠玉の一冊として座右に置きたい。

第四句集上梓を心から祝いたい。

増成栗人句集「草蜉蝣」鑑賞

老いたなりの青春性を



愛されずして沖遠く泳ぐなり

藤田湘子

小田原出身の湘子の代表作。「愛されずして」には、師・水原秋櫻子との反目、その頃の鬱屈とした気持ちが入められているといわれる。「沖」は、育った町、御幸の浜の沖なのではと想像する。この浜は、波の音と対話し思索に耽るにはうってつけの海岸だと訪れて感じた。湘子の反目や鬱屈は、この浜の岸から遠く離れて、鎮まり癒されたのではないか。確証のない鑑賞だが、この句と浜の風景を重ねてみるとイメージが広がる。



小田原・御幸の浜

JR東海道本線小田原駅の改札口に出ると、巨大な提灯がぶら下がっているのがまず目に入る。折りたたむことができ、雨にも強いということで、江戸時代の旅人に愛用された郷土の工芸品「小田原提灯」。童謡「おさるのかごや」にも歌われ、よく知られている。  
自肅期間中に都内に出ることがめっきり減り、神奈川県内で散策場所を探しているときに通ったのが小田原だ。  
駅前や小田原城周辺は観光地化されているが、一本裏に入った商店街は人もまばらで、古い看板建築なども残っており、ぶらり町歩きには最適である。旧東海道の宿場町でもあるので、「旧東海道を歩く」シリーズを断続的に書いてきた当コラムで取り上げるには絶好の場所ではないか。  
町には城下町・宿場町の面影に思いを馳せることができるように、歴史的町名碑が各所に建てられている。「欄干橋町」「鍋町」「大工町」など、旧町名はそこがかつてど

ういう場所であったかを想像する手がかりになる。  
小田原といえば、かまぼこである。蒸しかまぼこは、江戸後期に小田原の地で考案され、関東式の板かまぼことして全国に広まった。旧東海道や千度小路には老舗のかまぼこ屋が軒を連ねている。駅前の土産屋でも買うことができるが、本格的なかまぼこ好きは是非足を伸ばしていただきたい。干物屋や鯉節屋なども現役で、漁師町の霧困気が色濃く残るエリアだ。周辺は「かまぼこ通り」と名付けられ、店先にはテーブルも出ているので、気軽な食へ歩きも楽しめる。  
かまぼこ通りから海岸に出ると、「御幸の浜」。明治六年に明治天皇と皇后が地引網漁をご覧になる行幸があったので、この名が付けられた。西湘バイパスを潜らないと浜に出られないのは無粋だが、晴れた日は伊豆半島や三浦・房総半島まで見渡せる景色のよい海岸である。

# 羽音集

谷口摩耶 選



記念樹の花桃すでに三十年  
声だけで会へぬ日々なり藤の花  
柿の芽のまだ幼くてサラダ色  
芍薬の蕾を撫でて通りけり  
お母さんと医者と呼ばれてカーネーション  
母の日の娘と嫁のプレゼント  
父の名を唱ふ仏壇花ぐもり  
雨上がり凜と江ちたる花菖蒲  
退院の夫を待ちをり花みかん  
駅までの道を歩くや麦の秋  
笑むははの写真に笑みて母の日よ  
川波に夕日うつりて業平忌  
湯呑み手に回ってくる鮪待ちてをり  
暑き夜やホール染めたるドラムソコ  
山つつじ夕影残る七曲り  
身の丈の暮しでありぬ黄水仙  
教会の塔の尖端春の雲  
七色に流れてゆきぬ石鹼玉  
今まさに零れむばかり藤の花  
庭石を覆ふ杜鵑花の花盛り、

喜多方 福地タカ

豊川 村手雅子

豊川 三浦信行

札幌 上杉 馨

# 票庵閑話

史 丸



台いような季節を  
歳時記なり  
適当に選ん  
でるだけで  
実はまだに  
季節を選ぶ基準が  
理解できて  
ないんです  
そこだね  
基準を選ぶ  
基準を  
あえて  
あげれば



読んだ人が  
内容を共感  
できる句に  
する季節が  
どうかな  
例えば  
抽象的な内容や  
概念を詠んで  
想起させる肉体的な  
イメージが  
なにもない  
と書けば



目で昇える  
具象的な  
季節を  
取り合わせて  
句にリアリティを  
もたせるのも  
方法の一つ  
だね  
ナル  
ナル



ダイエツトといふ  
概念で  
はなく  
フユト  
さんと  
いっ  
リアリティを表現  
するんです  
ね

<http://www.haisi.com/koh/index.htm>